

心と言葉のグローバル英文法 要約

〈はじめに〉

【要約】

- 学校英文法だけをマスターしても英語の読み書きができるようにはならない。
- 英語をマスターするには英語での認識・思考・表現の方法を理解しなければならない。
- 「心と言葉のグローバル英文法」は英語における世界認識・思考・表現を詳細に解明する。
- 目標は英語の世界を深く理解し、それを日本語のサブシステムとして使いこなすことにある。

1 章 英語の基本単位

【要約】

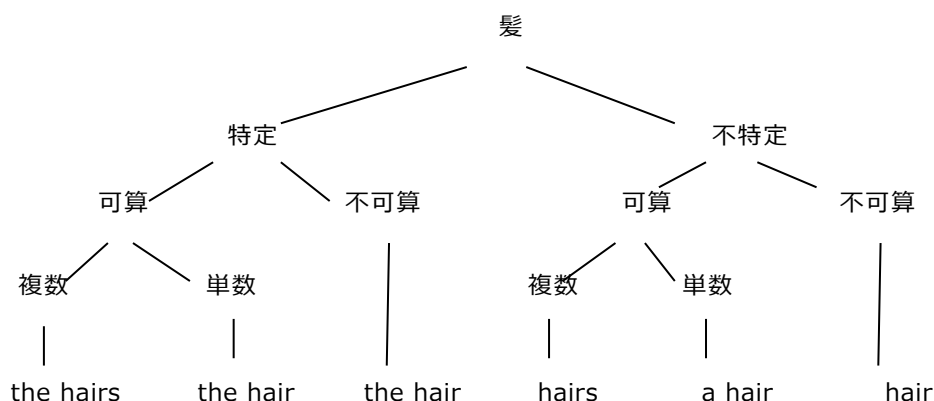
- 英語の Part of Speech とは語の機能/用法の分類のことであって、語そのものの分類のことではない。それを明治の誰かが「品詞」と「誤訳」してしまった（「詞」は「語」そのものの指す）ため、ほとんどの日本人が「品詞」とは語そのものの分類のことだと思い込んでしまった（その背景には日本語の特性と英語の特性の本質的な違いがある）。そしてこの「誤訳」が日本人の英語の理解と運用を 100 年以上にもわたって阻害し続けている。
- 英語の語の機能/用法の広さは、それぞれの語によって異なる。ひとつの機能/用法（品詞）しか持たない語もあるが、多くは複数の機能/用法（品詞）を持っている。
- 名詞（noun）は、「もの」を表現する機能/用法である。センテンスのなかで主語、目的語、補語として機能する語が名詞である。「名詞が主語/目的語/補語になる」のではない。「主語/目的語/補語が名詞」である。また語のかたちや位置からも、その語が名詞かどうかを（ある程度だが）判別できる。
- 動詞（verb）は構文の必須要素である Predicate（述部）の中核となす機能を持ち、「こと」を表現する。名詞を修飾する語が形容詞である。副詞は動詞を修飾するだけでなく、形容詞、副詞、センテンス全体も修飾する。
- 前置詞とは、主に動詞の現在分詞形から派生して、意味的には空間的イメージ認知に特化し、用法としては前置詞用法のみに特化した「特殊」動詞のことである。前置詞には動詞と同様に他動詞方法と自動詞用法がある。前置詞句は分詞句と同じものとして理解すべきである。
- 接続詞（conjunction）は、センテンス要素の関係性を示す言語表現である。代名詞（pronoun）は名詞・名詞句の代わりに用いられる語のことである。「代名詞」は英語ではそれなりに意味のある概念であるが、日本語では意味のある概念ではない。

- 「句」(phrase) とは、特定の働きをする語の集合体(word group)のうち、内部に主部・述部の構造を持たない集合体のことをいう。句は、「機能」(主部句・述部句・就職部句)と「形態」(名詞句・前置詞句・分詞句)という2つの観点から分類することができる。重要なことは、「機能」による分類と「形態」による分類を決して混同しないことである。この2つの分類はまったく別の概念である。
- 特定の働きを受け持つ語群のうち、内部に主部・述部の構造を持っているものを「節」(clause)という。「句」は節のなかの主部・述部の一部が省略されたものである。「節」が兄貴分であり、「句」が弟分である。

2章 名詞認識

【要約】

- a や the の使い方、単数や複数の使い分けを考える際に最も大切なことは、太陽や月に the をつける、最上級に the をつけるといった用法を丸覚えするのではなく、冠詞や単数複数を使って英語ネイティブがどのように世界を認識しているのかを、まずしっかりと理解することである。それがわからなければ、いくら用法を覚えても、うまく使いこなせない。
- 日本語と英語では、「もの」(名詞)に対する認識方法が本質的に異なる。日本語での名詞認識は、単層構造である。いっぽう英語の名詞認識は、「特定/不特定、可算/不可算、単数/複数」の三層構造である。図にすると次のとおりである。



- 英語という言葉では、名詞を必ず三層構造で認識して表現しなければならない。これは英語としての義務的条件であり、英語の名詞は、この3つの認識経路を通さずに表現することはできない。
- 英語の名詞には、「純粹不可算名詞」「純粹可算名詞」と呼ばれるものがある名詞中心の世界観を持つ英語では、動詞中心の世界観を持つ日本語に比べると、数量についてははるかに厳密な区別をおこなう。all/every/each の認識、some/several/a few の認識、no の認

識、a xxx of の認識などは特に重要である。

3 章 動詞認識

【要約】

- 「心と言葉のグローバル英語文法」では英語の世界で生じている「コト」に対する認識を、①コトの「時間」認識、②コトの「性質」認識、③コトに対する「判断」認識の 3 つのカテゴリーに分けて考える。
- 近代西欧の世界観で認識する「コト」は過去から現在そして未来へと一直線上に流れるという時間認識を持っている。それにあわせるかたちで英語も「テンス（時制）」という文法カテゴリーを設けているが、実際の表現としては英語の動詞に「未来形」という独立したかたちはない。
- 英語の世界認識では「コト」を「時間」だけではなく「性質」によっても区分している。「性質」の区分の仕方は、大きく分けて、コトの「状態」と「関係性」に分かれる。
- 英語のコトの「状態」の認識には、大きく分けて①そのコトが、すでに終わったことかどうか、②そのコトが、継続していることかどうか、という 2 つの区分がある。「コトの状態」の認識は文法カテゴリーとしては「アスペクト（相）」という名前で呼ばれている。そのなかに「完了相」と「進行相」がある。言語表現としては「完了相」には「have/be+過去分詞」、「進行相」には「be+現在分詞」が用いられるが、それだけが英語のコトの状態を表現する手段なのではない。
- 英語の世界認識では「コト」の性質を「主体」と「客体」という 2 つの「モノ」のあいだの「関係性」によって区分をする。近代英語の世界観は、「モノ」と「モノ」が「コト」によってつながるというものである。一方、伝統的日本語の世界観は「コト」のまわりに「モノ」があるというものである。
- 英語の思考の基本形はモノが別のモノに対してなんらかの影響を与えるというものである。「心と言葉のグローバル英語文法」ではこれを「二項対立の思考」と呼び、それを文法カテゴリー化したのが「他動性」（Transitive）と「非他動性」（Intransitive）という概念である。英語の動詞は「他動性用法」と「非他動性用法」の 2 つの用法のどちらも持っている。ただし少数ではあるが「他動性用法」しか持たないものや「非他動性用法」しか持たない動詞もある。他動性用法/非他動性用法の識別は英語理解における最大のトラブル震源地である。
- 英語ではコトとコトとの関係性の「影響の方向性」にも目を向ける。Subject が Object に対して影響を与える関係性を「能動性」（Active）と呼び、Subject が Object から影響を与えられる関係性を「受動性」（Passive）と呼ぶ。この認識を「態」（Voice）という文法カテゴリーにして、「能動態」（Active Voice）、「受動態」（Passive Voice）と命名している。
- コトに対する「判断」とは、表現者が表現しようとするコトをどのように捉えているのかという心的な態度のあり方を指す。「心と言葉のグローバル英語文法」では、英語でのコトに対する表現者の「判断」を、①そのコトは「現実」なのか「想定」なのか、②そのコトは「どの程度確実」なのか、という 2 つに大きく分けて考える。文法カテゴリーとしては①に対して「ムード」、②に対して「モダリティ」というカテゴリーを設定する。
- 英語には 3 つの「叙法」がある。「叙実法」は、いま表現しているコトが現実存在すると捉える認識

のあり方を示している。「叙想法」は、いま表現しているコトが現実ではない（頭のなかで考えられているだけ）という認識のあり方を示している。「不定法」は、コトが現実的に存在するかどうかという点については叙実法/叙想法のような判断をしないという心的な態度を示している。

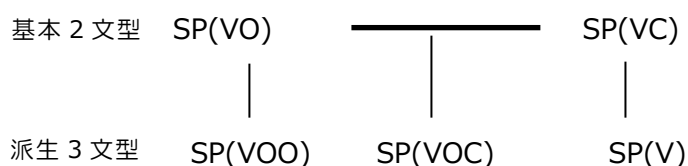
- 「心と言葉のグローバル英文法」では、コトに対する表現者の「判断」について、そのコトを現実として捉えるのかそうでないのかとともに、そのコトが確実なものかそうでないのかという観点からも分析する。これを「モダリティ」と呼ぶことにする。モダリティの主要な表現形式は助動詞であるが、それだけではない。
- 認識と表現形式は一対一対応しない。ある認識は様々なかたちで表現することができ、ある表現形式は様々な認識を持つことができる
- 受動態を用いる理由としては①トピックを変えたい、②行為者がわからない、③行為者を隠したい、④客観的にみせたい、の4つが考えられる。①と②は正当な理由だが、③と④は正当な理由とはいえない。
- 「時制」(Tense) とは、英語でのコトの時間認識に対応する言語表現形式のひとつである。認識としては、おもに時間直線上の過去のコトを表現するのであるが、そのほかにも、過去時制は書き手の「現実ばなれ」の認識、すなわち叙想法を表現することができる。ゆえに過去時制イコール物理的時間の過去なのではない。
- 英語の現在時制（非過去時制）は、時間的な「いま」を認識しているというよりも、そのコトが「過去に縛られているわけではない」「現実にここに存在する」という認識を強く表現するものである。
- 日本語の否定認識と英語の否定認識のあいだには、①否定対象の位置、②名詞の否定の有無という2つの本質的な違いがある。

4 章 センテンスの構造

【要約】

- 学校英文法の5文型のルーツは英国で1904年に発刊されたC. T. Onionsの著書 *Advanced English Syntax* であるが、それがウェブスターの辞書とともに日本の学校英語教育に輸入されて定着した。しかし認識・思考の観点からみるとこの文型モデルSV, SVC, SVO, SVOO, SVOCの5つの文型をすべて同一認識レベルに置いてしまっている点において本質的な欠陥がある。
- 「心と言葉のグローバル英文法」では、SP(VO)とSP(VC)を基本2文型、SP(VOO)とSP(V)とSP(VOC)を派生3文型と定義する。図示すると次のとおりである。

基本2文型プラス派生3文型



なお現在の学校英文法で用いられる SP(SVA)や SP(VA)などについては派生文型の一部とする。

- 英語の世界認識では世界は様々な「実体」から構成されていると考えられている。実体はつねになんらかの「属性」を持っている。SP(VC)とは、Subject で表現される実体を持っている属性を表現するための構文である。
- 英語の世界認識では実体と実体のあいだにはつねになんらかの「関係性」があると想定している。SP(VO)は、Subject で表現される実体と、Object で表現される実体との関係性を表現するための構文である。
- SP(VOO)は、SVO の二項関係の認識から派生した構文のひとつである。SP(VOC)構文は、SP(VO)構文と SP(VC)構文とが複合化した構文である。SP(V)は、SP(VC)の派生構文である。認識の観点からみれば SP(VC)と同じである。
- 英語の「センテンス」とは「思考のまとまり」を表すものである。小単位の「思考のまとまり」だけを表現する文/センテンスを「原子命題文/センテンス」と呼ぶ。会話では、原子命題文をただ積み重ねるのが一般的である。
- だが書き言葉では、思考の基本単位をただ並べるだけでは複雑な思考をうまく表現することが難しい。そこで思考の基本単位を複数組み合わせることで「思考の複合単位」をつくり出し、それを言語表現として示そうとする。これを「分子命題文/センテンス」と呼ぶことにする。
- 原子命題文/センテンスを順に並べるか、あるいは分子命題文/センテンスとしてまとめるのかは恣意的な選択である。その選択基準は命題や情報構造によって決まるのではなく、文体、社会的要請、個人的要請によって決まる部分が多い。
- 基本的に英語センテンスは Subject（主部/主語）、Predicate（述部/述語）、Modifier（修飾部/修飾語）、Connector（接続部/接続語）の 4 つの要素から構成されている。英語センテンスの要素はこの 4 つだけである。Subject、Predicate、Modifier、Connector という 4 要素をただポンポンと並べただけなのが英語センテンスである。
- Subject、Predicate、Modifier、Connector だけがセンテンスをかたちづくるというこの事実こそが英語におけるなによりも重要なポイントである。ところが従来の日本の英文法書ではこのポイントについての解説がほとんどなされていない。なぜか。英語人にとってこの事実はあまりに当たり前すぎるので文法書で解説するほどのことではない。だからその解説がほとんどない。日本の英文法書はその英米の英文法書の構成を真似ている。
- しかし日本語人にとって英語のセンテンスが Subject、Predicate、Modifier、Connector だけでできており、それを使って物事を考えてそれを表現していくということは、当たり前どころか驚嘆すべきことである。日本語で物事を考えてそれを表現する際には、英語のような Subject、Predicate、Modifier、Connector の組み合わせなど、どこにもないからである。
- したがって「日本人の日本人による日本語人のための英文法」を解説するのであれば、英語のセンテンスが Subject-Predicate と Modifier だけでできているという事実を詳しく論じておく必要があ

る。そうしなければ日本語人には英語の認識・思考・表現の根幹の部分を理解できないからである。

- Subjectと Predicate はセンテンスにおける必須要素である。この2つが揃ってこそ、はじめて英語のセンテンスが成立する。通常は Subject がトピックであり、Predicate がメインコメントである。
- Modifier（修飾部）と修飾語句は英語センテンスにおける補足部分である。なお、Modifier（修飾部）と修飾語句のちがいは、「Modifier（修飾部）」が思考のまとまりの基本単位である原子命題を表現していると書き手/読み手が判断していると判断しているものであるのに対して、「修飾語句」は思考のまとまりの基本単位である原子命題を表現しているとは書き手/読み手が判断していないものである。このように「心と言葉のグローバル英文法」は人間としての判断（心の働き）を文法基準の大前提としている。
- Modifier（修飾部）は Adjective Modifier（形容詞的修飾部）と、Adverbial Modifier（副詞的修飾部）の2つに分類することができる。修飾語句も同じである。
- Modifierと修飾語句は思考内容としてのサブコメントを示すものであるが、そこで表される思考内容を分類すると、たとえば限定、補足、条件、原因、結果、対比、比較、例示、譲歩などに分けられる。
- Subject、Predicate、Modifier、Connector には様々なかたちを用いることができる。実際のところ Subject、Predicate、Modifier、Connector とともに、じつに様々なかたちをとる。長さも1語だけのときもあれば数十語にもなるときもある。
- Adjectival Modifier/形容詞的修飾語句が置かれるべき位置は安定している。基本的に Subject や Object といった補足されるべき情報のすぐ後ろに置かれる。
- Adverbial Modifier/副詞的修飾語句が置かれる位置であるが、これこそが英語構文での最大の問題点のひとつといえる。一口にいえば、Adverbial Modifier/副詞的修飾語句はどこに置いてもかまわない。置かれるべき位置がきわめて自由なことから、Adverbial Modifier は Free Modifier と呼ばれている。

5章 構文分析

【要約】

- センテンスを適切な構文要素に分解し、その要素間の関係性を論理的に説明することを、「構文分析」または「パーシング」という。学校文法的な英文解釈もまた構文分析の一種である。
- 動的に構造分析をすることは英文の理解と実践にとって非常に役に立つ。言語としての最大の特徴は、一本の時間線上にある種々の情報を動的に理解していくことにあるからである。
- 動的分析が非常に困難なセンテンスのことを専門用語では Garden Path Sentence と呼んでいる。日本語の訳語は、ここでは「迷路文」と呼んでおく。
- センテンスを動的に読んでいるあいだのトラブルを防ぐための対策としては、(1)読みにおける構文認識の予測パターンの幅を広げておく、(2)形態から品詞を決めてしまうことを避ける、などが考えられる。

- 構文パターンの認知の幅を広げ、次にくべき構文要素を適確に予想しつつ、英語を英語として動的に理解していくことが、正しい英語の読み方である。そのように読むための必要不可欠なツールこそが真の意味での英文法力である。

6 章 センテンスの階層化

【要約】

- センテンスを階層化（二次元化）をする理由は、直線（一次元）に並べているだけでは見えてこないセンテンスに関する以下の本質、①センテンスはいくつもの思考の基本単位の集合体である、②思考の基本単位のあいだには階層レベルの違いがある、の2点が見えてくるからである。また階層化をすることでセンテンスを効率的かつ論理的に組み立てることができるようになる。
- センテンスの階層化のもっとも一般的なかたちは、まず主節のレベル1を述べ、そのあとにレベル2以下の描写を続けるというものである。それとは真逆に、副詞的修飾語句（レベル2以下）を最初に述べてから主節（レベル1）をもってくるというかたちのセンテンスもある。上位レベル→下位レベル、下位レベル→上位レベルという2つの情報の流れを合体したかたちもある。さらに複雑な情報フローとしては、レベル1（主節）のあいだにレベル2以下の修飾語句をはさみ込む、というかたちもある。
- 読み手の動的理解という観点からみると、主節をまず置き、そのあとに修飾語句を積み重ねていくという方法が最も理解しやすいものである。逆に、主節のあいだに修飾語句をはさみこむかたちが、最も理解が困難なものである。

7 章 内容からみたセンテンス

【要約】

- 英語のセンテンスは、パラグラフ・テキストのミニバージョンといってよい。パラグラフ・テキストに「イントロ」「トピック」「サポート」があるように、センテンスにも「イントロ」「トピック」「サポート」がある。修飾語句が「イントロ」と「サポート」であたり、主節が「トピック」にあたる。
- 実際の文章ではイントロ、トピック、サポートにあたるものがすべて揃っているかたちはそれほど多くない。最も数多くみられるかたちはトピックとサポートのみを組み合わせたセンテンスである。イントロからトピックへとつながり、そこでセンテンスがそのまま終了してしまうパターンもよくみられる。
- ただ、思考のかたまりをひとつのセンテンスで表現しようとする傾向が極端なまでに強調されると、一般読者にとってはほぼ理解不能なレベルにまで達してしまう。そうしたセンテンスは明らかに悪文である。

8 章 情報構造

- 「心と言葉のグローバル英文法」において情報構造として具体的に考察する項目としては、旧情報・新情報、焦点化、重み、流れがある。
- 旧情報から新情報へ——私たちは、知っていることを手掛かりとして知らないことを理解していく。したがって情報構造としても、まず旧情報を提示してそのあとに新情報を提示するのが普通である。

- 新情報は出てきた瞬間に旧情報となり、それが新たな新情報を導く役割を果たす。
- 場合によっては最初から新情報を提示したいときもある。そのときには、その直後にサブコメントをつけることで内容を特定化し、新情報を旧情報化することができる。
- 情報の焦点化——どの情報に焦点を合わせるかで、伝えたい内容、伝わる内容が大きく変わる。書き手は、自分が伝えたい内容にしっかりと焦点を合わせなければならない。
- 原則的に英語センテンスでの焦点は文末にある。この特徴はエンド・フォーカス（End Focus）と呼ばれている。
- 英語センテンスで文末の次に焦点があたるのは文頭である。ただ文頭には旧情報が置かれるのが一般的であり通常は文頭に焦点が置かれることはない。しかし語順変更や強調構文といったかたちを使うことで文頭に焦点をあてることが可能である。
- エンド・フォーカスと置き換えを合体させた処理は「外置」（extraposition）と呼ばれている。
- 情報の重み——「心と言葉のグローバル英文法」では「焦点化」とは「焦点 vs 背景」という二分法的な表現であり、「重み」とは「軽い⇔重い」の数量的な表現であるとそれぞれ分けて考える。「焦点化された」情報とは「きわめて重い」情報という位置づけになる。
- 修飾語句の「重み」とは、焦点化のように「きわめて重い」のではなく、修飾句と修飾節で「重みが少し異なる」という観点からの考察である。
- 情報の流れ——あるセンテンスから次のセンテンスにつながるときにはそこに含まれるトピックが無理なくつながらなくてはならない。これを「トピックフロー」と呼ぶ。もし 2 つのセンテンスのトピックのあいだに関連性がなければ、たとえそれぞれのセンテンスが素晴らしくとも文章全体としてのレベルは低くなる。
- 英語のセンテンスでは、最初にトピックが示され、続いてコメントが展開され、最後に重要な新情報が示される。そしてその新情報を次のセンテンスのトピックとして最初に示し、それをコメント部分で展開し、最後にまた重要な新情報を置くという展開の仕方をする。こうしたテキストの流れのことを「トピック・ストリング（Topic String）」という。
- 文章がリレー競技だとするとバトンにあたるものが必要である。それが「トランジション表現」（Transition Words and Phrases）である。英語には様々なタイプのトランジション表現が用意されている。
- トランジション表現以外にも、センテンスとセンテンスをつなぐ方法がある。それが「トランジション・フック」（Transition Hook）である。「フック」とは、読者の気を引く（ひっかける）ことを示しており、英文エッセイでは、前のセンテンスやパラグラフとのつながりを示すという意味で用いられる。

9 章 情意表現

- 英語の情意表現は、助動詞と副詞を中心にして、SV 構文、付加疑問、助動詞などで表現される。
- 副詞・副詞節は、話し手/書き手の情意を表す最も一般的な言語表現である。一部の SV 構文でも、情意は表現できる。助動詞は、述語動詞が示す「コト」の部分だけに対する話し手/書き手の感じ方や判断を表す表現である。

- 日本語人は情意表現を使いすぎる傾向にある。たとえ日本語人であってもグローバル英語を使う場合の第1の目標はあくまで「内容を明確に伝えること」にある。グローバル英語を用いて行うべきことは、まずなによりも自分の述べたい内容を世界の誰にでもわかるかたちで明確に述べることである。そのためには情意表現の使い過ぎはぜひとも避けなければならない。

10 章 文体

- 文体を理知的に考察する際の分析要素としては、語彙、構文（センテンスの長さ・複雑さ、受動態、ペア表現、名詞化）、冗長性・省略、音韻要素などが挙げられる。
- 語彙——英語の語彙はゲルマン系語彙とラテン/ギリシャ語系語彙の二重構造をしている。この多重化のために英語の語彙は良くいえば非常に多様性に富むものとなり、悪くいえば、似たような意味の膨大な語彙を無駄に抱えるものとなった。
- 文体的にみれば、ゲルマン語系語彙が多く使われると日常的で柔らかい印象の文体となり、ラテン/ギリシャ語系語彙が多く使われると非日常的で硬い印象になる。
- 構文——文体を決める構文的な要素には、センテンスの長さ、センテンスの複雑さ、受動態、名詞化、ペア表現などが考えられる。
- よい英文をつくるためにはセンテンスは短いほうがよいのか長いほうがよいのかに対する答えはない。ただ思考の観点からみれば、ある程度のまとまった思考を表現するためには英語では長いセンテンスが必要になると考えてよい。
- 複雑なセンテンスがすべて悪いとはいえないが、やはり基本的にセンテンスはシンプルで明快なほうがよい。英語ノンネイティブである日本語人が英語を書く際にはそのことがさらに強い。
- Periodic sentence（掉尾文）とは、センテンスの最初の部分から修飾語句を次々と技巧的に連ねていき、読み手の緊張感を高めていったうえ、最後にクライマックスの述部へと落とし込む、というかたちのセンテンスのことである。現代の英米ライティングの世界では基本的に避けるべきものとされているが、実際には、Periodic sentence 的な文体はいまも頻繁に用いられている。これは、センテンスが長くて複雑であればあるほど知性と教養が高いとみなすメンタリティが英語ネイティブのあいだで今なお根強く残っていることによるものである。
- Cumulative sentence（積み上げ文）とは、思考の流れのままに順番に表現を積み重ねていくスタイルのセンテンスのことである。Cumulative sentence の特徴は、かたちが思考の流れと一致しているために読み手にとって非常にわかりやすいことである。そのいっぽうで思考のまとまりに欠けやすいともいわれている。
- 受動態——能動態のかわりに受動態を多く使うと、没個性的で堅い文体になる。
- 名詞化——「名詞化」（Nominalization）とは、センテンスのなかで動詞や助動詞として用いている語彙の形や機能を変えて名詞として用いることをいう。名詞化の処理を使えば使うほど、文体は没個性的で堅い印象になる。
- ペア表現——どの言語でもペアや列挙という表現技法は重要なものであるが、英語ではペア表現が重視される傾向が他の言語よりもはるかに強い。

- 繰り返し——英語では繰り返し表現はテキストの良さを損なう元凶のひとつとされている。一度出てきた名詞の代わりに it/he/she/they などの代名詞が使われるほか、動詞も別の語彙に容赦なく置き換えられる。ただしこうした言い換え表現は文章の単調さを避ける以上に文章の内容を曖昧にして分かりにくくしてしまうことが大半である。そのため、できるかぎり避けるべきものだというのが多くの文章専門家たちのあいだの一致した意見である。
- 無駄を避ける——「無駄がないこと」は、あらゆる英語のテキスト論で第 1 に挙げられる良い文体の必須条件である。
- わかりやすいこと——「わかりやすこと」も、ほぼすべてのテキスト論で主張されている良いテキストの必須条件である。
- 音とリズム——音やリズムも英語センテンスの魅力を決める重要な要素である。
- 専門表現——それぞれの専門分野でしか通用しない独自表現は「ジャーゴン」(Jargon) と呼ばれる。ジャーゴンには一般的にマイナスイメージがつきまわっているが、専門分野の英文であればジャーゴンを避けざるを得ない。英文を書く際にはそうした状況をよく鑑み、一般的なテキストであればジャーゴンの使用をなるべく避け、その分野の専門家向けの文章であれば適切なかたちでジャーゴンを使用していかなければならない。
- テキストの思考の基底をなしているトピックは「ベース・トピック」または「グラウンド・トピック」と呼ばれる。文体的にみると We や You を代表とするベース・トピックを Subject としたセンテンスは日本人にとって非常にわかりやすく、つくりやすいものである。日本語は「人の視点」「共同の視点」を中心とする言語であるので We や You という概念とは相性がとても良い。したがって英文をつくる際には、まずは We や You を Subject としてつくってみることをお奨めする。
- レトリック——英語はペア表現、列挙、同格といったかたちをきわめて頻繁に用いる言語である。この構造をどの程度まで意識しているかで私たちのつくる英文の文体は大きく変わってくる。

11 章 テキスト構造

- 私たちはなぜテキストをつくるのだろうか。テキストをつくるとは、ひとつの「問い」を自分なりに用意して、その問いに対して自分なりの「答え」を述べるという行為にほかならない。
- 多くのテキストでは「問い」は表面に直接的には示されない。テキストとして表現されるのは、おもに「答え」のほうである。そのためテキストの根底には「問い」があることは気づきにくい。しかしすべてのテキストの根底にはなにかしらの「問い」が確かに存在する。そして良い「問い」を生み出し、それに対して良い「答え」をつくり出すことが良いテキストをつくるための根幹である。テキストを「いかに」書くかという文章技法はテキストづくりにとって枝葉の部分にすぎない。
- テキストのつくり方で最初に確認しておくべきことは、テキスト表現形式は「問い」のあり方によって千差万別であるということである。
- 一般に知的英語のテキストは「ブロック構造」をしている。センテンスという小ブロックを集めて中ブロックというパラグラフをつくり、それを総合して大ブロックのテキストに至るのである。センテンスの拡大版がパラグラフ、パラグラフの拡大版がテキストである。

- 多様なテキスト表現に共通する最重要要素が「思考の流れ」である。思考の流れがうまくつながっていないテキストは読みにくくて論理整合性に欠け、価値が低いものである。英語テキストの思考の流れは英語センテンスでの思考の流れの拡大版である。まずメインピックがあり、それを様々なサブコメントで補足していくかたちである。
- アカデミック・ライティングはその名前のとおり学問分野で使われるテキスト形式であるが、そのほかにも新聞や書籍などのテキストでよく使われている。知的な領域のテキストをほぼすべてカバーするものだといえる。
- アカデミック・ライティングも文学と同様にテキスト全体からみれば部分集合にすぎないのであるが、その応用範囲は文学よりも圧倒的に広いといっていよう。またある程度の定型化も可能である。
- お互いにまったくかけ離れた理性や感性を持った同士の共存共栄を図るひとつの手段が論証である。そして現在の日本人は、まったくかけ離れた理性や感性を持った他者との共存共栄を迫られている。こうした状況は私たちが営々として培ってきた「思いやりの心」だけでは十分に対応ができない。私たちが西欧的な論証の技法を学ばなければならない理由が、ここにある。